

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第30回

## 隣国の小さな宝物箱

金煥基美術館を訪問する [2004年11月5日(金曜日)]

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、  
総合研究大学院大学)

ひたすら斑点で埋め尽くされた平面。だがキャンヴァスに近寄って見ると、その斑点のひとつひとつを配置するに当たって、何層もの周到な下準備がなされていたことに納得が行く。斑点の画家として著名な韓国のモダニスト金煥基 (Kim Whanki: 1913-1974) は、その後半生、パリ (1956-58)、ソウル (1958-63) 時代を経て、晩年の10年間をニューヨークに過ごした。知命を迎えて新大陸の市場で国際的評価を得るに従って、その画境は、ひたすら斑点を穿つ、禁欲な道徳家の行とでもいふべき営みに収斂していったように見受けられる。

この画家を記念する美術館が、ソウル市郊外の北西辺に位置している。あたりはかつての両班階級から比較的庶民層にいたるまでの人々の住まいが密集する丘陵の一角。1992年に落成した建築は、ウ・ギュスン (Kyu Sung Woo) の設計になり、韓国で最高の建築との評価も得たという。11月初旬、世宗大學校で講演を依頼された折りに、ようやく訪問する機会を得た。南に傾斜した斜面を利用した土地は、けっして広大とはいえないが、階段に導かれた右手には、受付と売店を兼ねた広間が用意されている。フランス語や英語での出版も含め、画家の

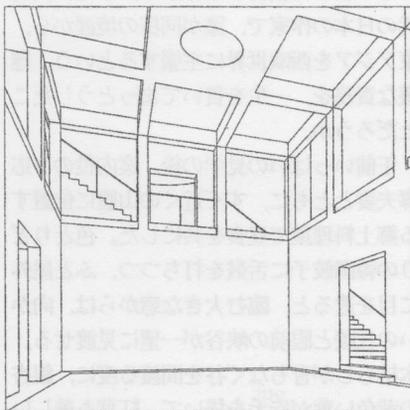
画業を辿るに役立つさまざまな出版物が、奥の棚に並べられている。その左手には、金煥基の作品を素材とした美術館グッズの陳列。晩年の作品は藍を基調として、重苦しい雰囲気を漂わせる。だが、それに先立つニューヨーク時代初期の60年代末の作品には、あるいは暗色の地のうえに白の輪郭を伴って、あるいは逆に白地に灰色の輪郭に囲まれて、エメラルドやルビー、あるいはサファイヤのような半透明の色斑が、でんでんに散りばめられた、宝石のモザイクのような作品もある。ミュージウム・グッズとして販売されているハンカチやネクタイには、もっばらそうした1970年前後の表情を宿した作品が、選ばれていた。美術作品と工芸的意匠とは、東アジア文明圏でこそ不可分ながら、西欧ではとかく、あい反する価値観を担われがちだった。だがこうして、服飾のためのデザインに供されると、金煥基の作品が、西洋近代の造形的価値の相克をいわば縫い合わせて、ひとつの超克を成し遂げていた様も実感される。

その洗練の先に、造形的手段を意図的に切り詰めた、脱俗とも見える晩年の境地が開けてくる。深い艶消しの藍の下地の上に、白の斑点が埋め尽くされ、その斑点ひとつひとつに、漆黒の絵の具が、一筆一筆、淡

々と充填されてゆく。芸術家としての大仰な自己主張とは対局をなす、いわば修行者のような自制と忍耐の持続の果てに、ようやく巨大とってよい画面が生成する。そこには、もはや宝石の輝きには背を向けた画家の、虚飾を断った極北の境地が透視される。斑点を順々に設置してゆく、時間の営みの堆積ならでは韻律と濃淡を宿しながら、ひとつの生命の軌跡が、即物的な肌合いを刻んでゆく。とはいえその画面からは、そこに封じ込められた時の奏でる永遠が、暖かく、雅量を込めて放散され始める。

また無私を装った画面にも、様々な変奏が工夫されないではない。単彩の反復のあいまいに、突如原色を散らした花壇のような帯が現れる。また水平にひたすら一方向を守って穿たれていたはずの斑点が、ふと北極星を中心としたかのような、星辰の運行を描いて回転し始める。たとえば、パウル・クレーを思わせる肌色や燈色の明るい肌合いの壁面が、ふいに出現したりもする。緋の文様が繁殖を始めたかと思うと、それが千切った和紙のような断片へと切り分けられて、画面に思わぬ緊迫を走らせもする。その切断の反復が、青海波とは異質ながら、無限に繰り返される波頭の韻律を醸し出しもする。宇宙の呼吸を記録したオシログラフ。

そんな印象を抱きながら、屋外の石畳を



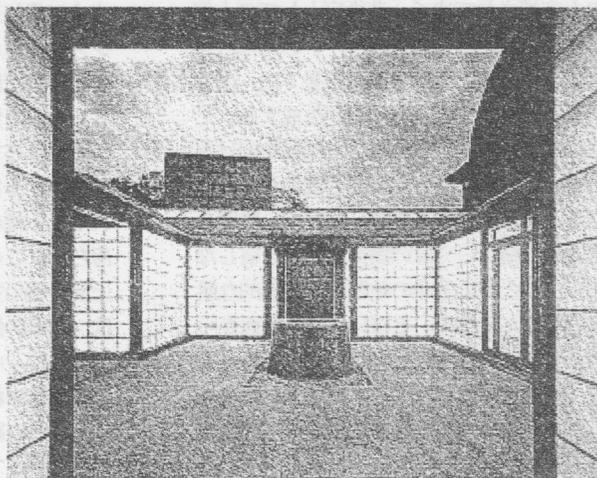
中央ホールのパス（ピロティから2階展示室へ）

さらに奥に進む。展示室に至る。エントランスから左に歩み入ると、こじんまりとした中<sup>ピロティ</sup>庭空間に至る。床には細かい木材がぎっしりと敷き詰めてある。中二階の回廊から見下ろすと、この床そのものが、画家の反復する世界にも照応する韻律に支配された、一幅の画面をなしていることが漸に落ちる。このピロティから階段を伝って、上部の展示室へと移動しよう。途中の窓には、画家の鉛筆線描からなる、単純極まりないクロッキーがスタンド・グラスとなって嵌め込まれている。偶然任せの風情なのに、思わぬ凝縮力が宿っており、しかもだからといって気持ちが苛くれ立つどころか、むしろ大らかな気分になれる。このあたり、画家の天才の在りかだろう。

階段上方の正面には大きな窓が穿たれ、彼方には裏山の姿が雄大に迫っている。巧みな借景というほかない、小憎らしい配慮だが、その両側に、蒲鉾型の銅版に葺かれた屋根裏を見せながら、ふたつの展示室が左右に広がっている。狭い階段を昇った末の、突如の解放感がいかにも心地よい。この大きな展示室にふさわしい大作に堪能したあとで、階段を途中まで降りると、先ほどのピロティの屋上にあたる中庭に出る。かつて画家が住んでいた市街の邸宅の構えを模した趣向だろうか、紙を貼った障子の風合を生かした乳白色の硝子格子が四方を囲んでいる。外国人の訪問者には東洋を感じさせ、東洋人たちには懐かしさを抱かせる演出だ。ここは時刻や四季とともに表情を変えてゆく。とりわけ日没頃に明かりが灯されると、親密な暖かさを、あたりに漂わせることになる。それが、周囲に密集する赤い瓦の邸宅たちと、不思議な調和を創りだす。心の故郷、といった興趣を誘う環境構成も心憎い。

ニューヨーク時代の画家と親交のあった建築家による、心尽くしの美術館に、ついうっかりと長居をしてしまった。訪問客は決して多くはない。だがあえてこのソウル郊外の閑静な住宅街を訪れるほどの来客たちは、金煥基の作品との静かな語らいの時

ピロティ上部の中庭



を大切に思って訪れる人ばかり。美術館側の接待も、そうした観客な繊細な感受性に、思慮深く対応している。慎ましやかで、けって出しゃばらないが、来客の求めるところを確実に汲む応接。そこにも、私立の美術館に自らの意思で奉職する館員たちの、密かな自信と心遣いが見て取れる。

あらためて、画家の作品に向き合ってみよう。一階のピロティの裏側には、曲面をなす壁にそって、画家のグアッシュとデッサンが展示されていた。晩年、抽象画に専念したようにみえる金煥基。だがそのグアッシュからは、初期より60年代に培った、単純化された具象的畫面構成の妙味が、晩年に至るまで新鮮な息吹を育み続けていた様が悟られる。奥行きのあるイリュージョンは排除しながらも、画家鍾愛の李朝白磁や三島出の焼き物をモチーフとして配した画面には、流浪の画家の望郷の念が、銜いなく露呈している。磁器の呉須絵付けをも思わせる、たっぷりとした筆遣いのグアッシュを見ると、実際に陶磁器の絵付けをしても、この画家は並々ならぬ才能を発揮したに違いない、と納得させるだけの力量が実感される。

デッサンはといえば、これはこれで、ピカソ晩年の奔放な一筆書きを明らかに意識した線描も在れば、ベン・シャーンのような

な社会派のアメリカン・シーンの画家からの感化も如実に感じさせつつ、政治的なメッセージは削ぎ落とした造形的理知が横溢する。作為もなくすなおに出現した実験的構想には、壁画家として金煥基の可能性も垣間見られ、結局この側面を作品としては十分に開花しないままに終わってしまったように見受けられる画業に、一抹の無念を禁じ得ない。それでも壺をあるいは小脇に抱え、あるいは頭に乗せた、上半身裸体の婦人像を配した50年代の幾多の作品を見るにつけ、同時代の日本の誰彼を思い起こしながらも、ここに戦後の東アジアの美学を具現したひとりの国際派が存在したことだけは、いまさらのように納得するほかなかった。同時代の日本の作家で、誰が同様の境涯から、東アジアを西欧世界に主張するという、難儀な責務を、一生を貫いてまっとうしたことだろうか。

午前いっぱいの見学の後、案内役の李応壽夫妻とともに、すぐ近くの山腹に位置する郷土料理屋で昼食を共にした。色とりどりの韓国餃子に舌鼓を打ちつつ、ふと屋外に目を遣ると、臨む大きな窓からは、向かいの丘陵と眼前の峡谷が一望に見渡せる。木枯らしが音もなく谷を間渡る度に、銀杏の黄色い葉が旋毛を描いて、紅葉も美しい丘を次々と越えて行った。